

ページ

2 復興へ ～復興に向けて活動されている方々を紹介～  
「東松島市学生震災ガイドTTT」

特集1

4 コロナに負けるな!  
みやぎを元気に!!

特集2

8 2050年の海は、  
魚よりもごみの方が多くなる?  
よりよい環境を未来につなぐために知っておきたい  
プラスチック問題

県政ニュース

10 みやぎ環境税 未来のために今できること  
令和元年度事業とその成果

県政ニュース

12 令和3年4月1日から自転車の保険加入が  
義務になります

県政ニュース

13 東京2020大会  
新・競技スケジュール発表!

14 おいしいものがたくさん!  
まんぷくみやぎ

16 7つの地域から虹メール

18 お出かけガイド

19 みやぎのふるさと通信(大和町・大崎市)

20 県立施設インフォメーション

21 県からのお知らせ

## みやぎの人口(令和2年8月末現在)

住民基本台帳人口	2,284,680人	世帯数	1,015,311世帯
男	1,114,207人	※うち、外国人住民基本台帳人口は22,369人です。	
女	1,170,473人		

今号の表紙

## 輝く紅葉 秋の色

秋が深まり、紅葉の美しい季節になりました。新型コロナウイルス感染症やインフルエンザなどへの対策を取りながら、秋を探してみたいかがでしょうか。



仙台・宮城観光PRキャラクターむすび丸



【写真の説明】1 現地で震災当時の写真を交えながらガイドする武山さん。2 学生同士でグループワークを行ってもらい、災害時の対応について議論することも(H30.3)。3 地震で大きな被害が出た熊本県で出張講演を行った(H29.11)。4 活動メンバーは皆、地元で被災した学生たち(H30.3)。【2～4東松島市・鈴木貴之さん提供】

出会ったらどうするか、自分自身に置き換え、当事者意識を持ってもらいたいと思っています。

— これからの展望は? —

活動メンバーは進学などそれぞれの道に進んでいます。私も大学生になり故郷を離れたのですが、自分ができる時にできることを、進学後も講演を続けているほか、帰省した際は地元でも活動を行っています。タイミングが合えば他のメンバーと一緒にすることもあります。

大人に近づき、これまでと同じことだけではなく、新しいことにも挑戦しています。絵を描くことが好きなので、実体験をもとにした絵本を作成中です。学業が忙しい時期は活動の機会も減るので、話すだけではない一つの伝承ツールとして、時間・場所を問わず幅広い年代に読んでもらい、自身の経験が伝わってくれればと思います。被災



東松島市学生震災ガイドTTT 武山ひかるさん(右)  
左は東松島市のカメラマン 鈴木貴之さん。鈴木さんは被災地の現状を知ってもらうために震災直後からボランティア活動を始め、TTTの活動も支援している。  
写真は被災した旧野蒜駅(東松島市震災復興伝承館)。

# 復興へ

復興に向けて、県内の各地域で活動されている方々を紹介します

## 「将来にわたって記憶を語り継ぐ」

東松島市学生震災ガイドTTT  
TSUNAGU Teenager Tourguide of HigashiMatsushima



今後50年、将来にわたって東日本大震災の実体験の記憶を語り継ぐことができるよう、地元の高校生有志が2015年に立ち上げた東松島市学生震災ガイドTTT。最年少メンバーとして、自身の被災経験を基に伝承活動を行う武山ひかるさん(大学2年生)にお話を伺いました。

### — 活動に参加したきっかけは? —

私自身、小学4年生の時に地元の東松島市で被災しました。家は全壊し、しばらくは避難所、仮設住宅で生活を送りました。その中で、多くのボランティアの方が訪れ、生活再建の過程でたくさんの方の支援を頂きました。特に、震災直後で遊び場が無い中、子どもたちを少しでも元気づけようと、故郷C・W・ニコルさん(※)が長野県にある「アフアンの森」に招待してくれたことには、大変感動したことを覚えています。

自分たちのためにいろいろと考えてくれる人たちがいる、もらってばかりではない、何か自分ができることはないかと考えたときに、自分が後悔したことを他の人に経験してほしいなと思う、子ども目線で感じた自身の被災経験を伝えることで、少しでも恩返しできればと思いました。そんな中、同じく地元で被災した同級生の友人に誘われて、高校1年生から活動に参加するようになりました。

※ウエルズ出身の作家、環境保護活動家。招待がきっかけで、東松島市立宮野森小学校の創設を支援した。

### — 活動の内容は? —

主な活動は、現地での震災ガイドや講演です。震災ガイドは、私たちが住んでいた大曲地区で行っています。時間の経過とともに

に、景色が様変わりしているので、当時の写真などを見せながら話をします。講演はこれまで北は北海道、南は熊本県まで、多い時期には1日3講演、先輩メンバーと手分けして10日で20講演を行ったこともあります。

当初は、震災当日の被災経験を話すことが多かったのですが、ただ辛いだけの経験を伝えたのでは漠然と怖いものと感じてしまっているので、正しく恐れようするために話を開き変えています。今は、幼かった自分がどう成長してきたかなど、これまでの経過を中心に話をしています。

避難所や仮設住宅での生活、ボランティアとの関わり、その中で支えとなったエピソードや、自身が抱えていた罪悪感(サバイバーズ・ギルト)からの立ち直りのことなど、自身が小学生で被災したからこそ分かる、大人では気づかない子どもの視点からの問題提起など、特に同じような状況に置かれている若い世代の人たちの助けになればと思っています。また、これまでの経験を話すことにより、自身の心の整理にもなっています。

### — 活動を通して感じたことは? —

聴講者は、一般の方からボランティア、自治体・教育関係者、防災の専門家などさまざまです。参加をきっかけに、震災について家で話し合ったり、学校の先生が全校生徒の前で話してくれたりします。自身の経験がより多く幅広い世代に伝わり、少しでも役立つ情報になればと思います。

一方で、経験を伝えること、理解してもらうことの難しさを感じます。捉え方は人それぞれであり、「かわいそうだね」「大変だね」というようなどこか他人事に捉えられてしまう場合もあります。そういう場面に

地は新しい施設ができるなど、見た目の復興は進んでいます。何かのきっかけで、当時の記憶がフラッシュバックしてしまうなど、まだ心の傷が癒えていない人もいます。心の復興は道半ばです。自然災害が多発している今、心の問題をサポートできる人材は今後さらに必要になってくるので、現在学んでいる福祉や教育分野などの知識を生かしたいと思っています。